

# ラテン語 *fons* の訳語としての 古英語 *ryne* について

石原 覚

## I

ラテン語 *fons* と古英語 *will* は、それぞれ次の (1)(2) に見られるように、共に「泉」の意味を表す名詞である。

- (1) In hac insula extrema est *fons* aquae dulcis, . . . incredibili magnitudine, plenissimus piscium, qui fluctu totus operiretur nisi munitione ac mole lapidum diiunctus esset a mari. (Cic. Verr. II 4, 118)<sup>1)</sup>

(この島の端に真水の泉があり、……信じられぬ大ききで、魚で満ち満ちており、海から堤防——石の大構築物——で隔てられていなかったならば、波で完全に覆われていることであろう。)

- (2) Wið flie eagsealf genim bromes ahsan & bollan fulne hates wines . . . do on þæs untruman mannes eagan & apweah eft þa eagan on clænum *wylle*. (Lch II (1) 2.14.2)<sup>2)</sup>

(眼の白斑には眼用軟膏。エニシダの灰と一杯の熱い葡萄酒を用意し、……病人の目に塗り、さらにきれいな泉で眼を洗うこと。)

一方、ラテン語 *fluxus* と古英語 *ryne* は、それぞれ下の (3)(4) に見られるごとく、共に「流れ」を意味する名詞である。

- (3) . . . quae crimina una laude pensat *fluxus* gravidarum utero sistens partusque continens ad puerperium. (PLIN. nat. 9, 79)<sup>3)</sup>

(……これらの非難を [コバンイタダキは] 妊婦の子宮からの流出を抑え、胎児を分娩まで留めておくという唯一の美点で補う。)

- (4) Frea engla heht þurh his word wesan wæter gemæne, þa nu under roderum heora *ryne* healdað, stowe gestefnde. (GenA 157)<sup>4)</sup>

(天使たちの主は、今空の下その流れを保つ水が、場所を定めて一つとなるよう、彼の言葉により命じた。)

同じ意味を共有するため、それぞれ *will* は *fons* の、*ryne* は *fluxus* の訳

語となり得る。

ここで注目に値するのは、*ryne* (流れ) が *fons* (泉) の訳語となる例が 1 例、古英語訳福音書 (WSCp)<sup>5)</sup>に見られることである。本稿では、このように *fons* を訳すのに *ryne* が用いられた理由について考察したい。

## II

ウルガータ (Vulgata)<sup>6)</sup>の福音書の中で *fons* は 4 例現れ、<sup>7)</sup>うち 3 例は次の (5)(6)に見られるように、*will* に訳されている。(5)では文字通りの泉が、(6)では比喩的な泉が言及されている。(以下、古英語とラテン語の対応関係を例示する際には、このように古英語訳とラテン語原文を並べて引用する。)

- (5) þær wæs iacobes *wyl*; Se hælend sæt æt ðam *wylle*. þa he wæs werig gegan. & hit wæs middæg. (Jn (WSCp) 4.6)

(そこにはヤコブの泉があった。イエスは泉の傍らに座っていた。彼は歩き疲れていたのである。真昼であった。)

erat autem ibi *fons* Iacob Iesus ergo fatigatus ex itinere sedebat sic super *fontem* . . . (Io)

(そこにはヤコブの泉があった。さてイエスは旅に疲れて、そのまま泉の傍らに座っていた。……)

- (6) Witodlice ælc þara þe drincð of þam wætere þe ic him sylle [. . .] bið on him *will* forðræsendes wætres on ece lif; (Jn (WSCp) 4.13–14)

(まことに私が与える水を飲む者は誰であれ、[……] 彼の中で、永遠の命へと湧き出る水の泉となるであろう。)

. . . sed aqua quam dabo ei fiet in eo *fons* aquae salientis in vitam aeternam (Io)  
(……私が彼に与えるであろう水は、彼の中で、永遠の命へと湧き出る水の泉となるであろう。)

*fons* が *will* に訳されるのは、下の (7)(8)におけるごとく、WSCp 以外にも見られる。

- (7) On þysse dune ufanweardre bæd Sanctus Albanus fram Gode him wæter seald beon to sumre his þenunge. & þa sona hraðe beforan his fotum wæs *wyl* upp yrnende, . . . (Bede 1 7.38.30)<sup>8)</sup>

(この丘の頂で聖アルバナスは、彼のある用事のために、神から水が

与えられるようにと祈った。すると直ちに泉が彼の足の前に流れ出たので、……)

... statimque incluso meatu ante pedes eius *fons* perennis exortus est, ... (BEDA. Hist.eccl. 1.7, 32)<sup>9)</sup>

(……直ちに彼の足の前に水路が狭まって絶え間ない泉が生じたので、……)

- (8) Ac an wyl asprang of ðære eorðan wæterigende ealle ðære eorðan bradnysse. (Gen 2.6)<sup>10)</sup>

(しかし泉が地から湧き、地の全面を潤していた。)

sed *fons* ascendebat e terra ... (Gn)

(しかし泉が地から湧き、……)

ここで注目すべきは、次の (9) において *fons* は *ryne* に訳されていることである。<sup>11)</sup>これは長血の女性をイエスが癒す奇跡の場面の一節である。

- (9) And þa sona wearð hyre blodes *ryne* adruwod. & heo on hire gefredde þæt heo of þam wite gehæled wæs; (Mk (WSCp) 5.29)

(すると直ちに彼女の血の流出が乾き、彼女は苦痛から癒されたのを彼女の中に感じた。)

et confestim siccatus est *fons* sanguinis eius ... (Mc)

(すると直ちに彼女の血の泉が乾き、……)

ちなみに *ryne* は WSCp の中でもう一箇所、下の (10) に現れ、<sup>12)</sup>そこでは *ryne* と同じ「流れ」を意味する *fluxus* の訳語となっている。

- (10) Ða genealæhte heo wiðæftan & æthran hys reafes fnæd. Ða ætstod sona þæs blodes *ryne*; (Lk (WSCp) 8.44)

(彼女は後ろから近づき、彼の衣服の縁に触れた。すると直ちに血の流出が止まった。)

... et confestim stetit *fluxus* sanguinis eius (Lc)

(……すると直ちに彼女の血の流出が止まった。)

では何故 (9) において *fons* を訳すのに *ryne* が用いられているのであろうか。

### III

次の (11) は (9) に対応するギリシャ語原典<sup>13)</sup>の箇所であるが、問題の *fons* は  $\pi\eta\gamma\eta$  に由来することが分かる。

(11) καὶ εὐθὺς ἐξηράνθη ἡ πηγή τοῦ αἵματος αὐτῆς . . . (Ev.Marc.5.29)

(すると直ちに彼女の血の泉が乾き、……)

このギリシャ語は下の(12)におけるように「泉」を意味する名詞である。

(12) διὰ παντός δὲ αὐτοῦ ἄλλο ὄρυγμα . . . ὀρώρκεται, . . . δι' οὗ τὸ ὕδωρ ὀχετεύμενον διὰ τῶν σωλήνων παραγίνεται ἐς τὴν πόλιν ἀγόμενον ἀπὸ μεγάλης πηγῆς. (Hdt.3.60)<sup>14)</sup>

(それ[トンネル]の全体に沿って、……別のトンネルが掘られており、それによって、大きな泉から引かれた水が導管に通されて、町に至る。)

ここで πηγή のいくつかの用法を以下の(13)~(18)により確認しておく。先ず πηγή は、それぞれ(13)~(15)におけるごとく、地中から水が湧き出る場所、川の水が湧き出る場所、すなわち川の水源、更に水以外の液体が湧き出る場所を指すことがある。

(13) μῆτι ἢ πηγή ἐκ τῆς αὐτῆς ὀπῆς βρῦει τὸ γλυκὺ καὶ τὸ πικρόν; (Ep. Jac.3.11)

(一体泉が同じ穴から、甘い水と苦い水を湧き出させるだろうか。)

(14) τοῦ δὲ Νείλου τὰς πηγὰς οὐτε Αἰγυπτίων οὐτε Λιβύων οὐτε Ἑλλήνων τῶν ἐμοὶ ἀπικομένων ἐς λόγους οὐδεὶς ὑπέσχετο εἰδέναί, . . . (Hdt.2.28)<sup>15)</sup>

(私と会話をしたエジプト人、リビア人、ギリシャ人の誰も、ナイルの水源地を知っているとは断言しなかったが、……)

(15) ἐν θερμῷ δὲ καὶ ὑγρῷ τὸ εἶναι μάλιστα τῷ ζῳῷ. τοιοῦτος δὲ ὁ περὶ καρδίαν τόπος. ἀρχὴ γὰρ αὕτη καὶ πηγή τοῦ αἵματος, ᾧ τρεφόμεθα, καὶ τοῦ πνεύματος, ταῦτα δὲ ὑγρά τε καὶ θερμά. (Alex.Aphr.de An.40.2)<sup>16)</sup>

(何より生き物に属するということは熱と湿気のうちにあるということである。心臓の周辺はかくのごときである。それ[心臓]は我々が養われる血の、そして靈魂の初めかつ源であるからであり、それらは熱くて湿っている。)

次に πηγή は、(16)におけるように、地中から湧き出る水を、また(17)(18)におけるように、湧き出る水以外の液体を指すことがある。

(16) . . . καὶ πᾶσαι αἱ ἀφέσεις Ἰουδα ῥυήσονται ὕδατα, καὶ πηγή ἐξ οἴκου κυρίου ἐξελεύσεται καὶ ποτιεῖ τὸν χειμάρρουν τῶν σχοίνων. (Lxx Jl.4.18)<sup>17)</sup>

(……ユダのすべての川床に水が流れ、主の家から泉が出て葦の流れを潤すであろう。)

- (17) ... ἴσχειν δ' οὐκέτι πηγάς δύναμαι δακρῶων, τὸν παγκοίτην ὄθ' ὀρῶ θάλαμον τήνδ' Ἀντιγόνην ἀνύτουσαν. (S.Ant.803)<sup>18)</sup>  
(……私は最早涙の泉を抑えることができない。このアンティゴネーがすべての者の寝室に向かうのを見ては。)

- (18) καὶ προσοίσει ἔναντι κυρίου καὶ ἐξιλάσεται περὶ αὐτῆς ὁ ἱερεὺς καὶ καθαριεῖ αὐτήν ἀπὸ τῆς πηγῆς τοῦ αἵματος αὐτῆς. οὗτος ὁ νόμος τῆς τυκτούσης ἄρσεν ἢ θήλυ. (Lxx Le.12.7)<sup>19)</sup>  
([傷のない1歳の雄の子羊などを] 主の前に捧げ、祭司は彼女について贖いをなし、彼女を彼女の血の泉から清めるであろう。これが男児または女兒を産む女の律法である。)

ならば問題の(9)が由来する(11)の「泉」は、水以外の液体が湧き出る場所(血が湧き出る体の部位)と、湧き出る水以外の液体(湧き出る血)の、どちらを指すと捉えるべきであろうか。TWNTは(11)のπηγήについて次のように記す。

Übertragen, insofern nicht an eine Wasserquelle gedacht ist, wird πηγή Mk 5, 29 gebraucht, wo es bei der Heilung der blutflüssigen Frau (als Eigentümlichkeit des Mk) heißt: καὶ εὐθὺς ἐξηράνθη ἡ πηγή τοῦ αἵματος αὐτῆς. Dabei wird nicht gemeint sein, daß die Quelle, das heißt der Ursprung ihres Blutflusses beseitigt wurde, sondern das wie eine Quelle ständig rinnende Blut versiegte, es kam kein Blut mehr.<sup>20)</sup>

(マルコ5:29のπηγήは、湧き水のことが考えられていないという点では、比喩的に用いられている。ここでは(マルコに特異なこととして)出血している女の癒しについて言われている: καὶ εὐθὺς ἐξηράνθη ἡ πηγή τοῦ αἵματος αὐτῆς [すると直ちに彼女の血の泉が乾き]。その際、泉、すなわち彼女の出血の源が取り除かれたということではなく、泉のように絶えず流れる血が涸れ、最早血が出なくなったということが意味されているのであろう。)

更に TWNT は上の記述の末尾に以下の注を付す。

Es entspricht genau דמי מקור Lv 12, 7, das LXX mit πηγή τοῦ αἵματος αὐτῆς übersetzt hat. 20, 18 hat LXX den gleichen hbr Ausdruck mit ῥύσις τοῦ αἵματος αὐτῆς (vgl Lk 8, 44 u Mk 5, 25 Par) wiedergegeben (...);

doch bezeichnet der hbr Ausdruck hier weniger den Blutfluß als den Ort desselben, die Scham (...). Medizinischer tt in diesem letzten Sinn wird πηγή τοῦ αἵματος Mk 5, 29 nicht sein.<sup>21)</sup>

(それは LXX が πηγή τοῦ αἵματος αὐτῆς [彼女の血の泉] により訳したレビ記12:7の מִקְרַר דְּמִיָּה [彼女の血の泉] に正確に対応する。20:18で LXX は同じヘブライ語の表現を ῥύσις τοῦ αἵματος αὐτῆς [彼女の血の流出] (ルカ8:44、マルコ5:25および並行箇所参照) により表した(……)。だがここでヘブライ語の表現は出血というよりむしろその場所、すなわち陰部を意味している(……)。マルコ5:29の πηγή τοῦ αἵματος [血の泉] は、この後者の意味の医学用語ではないであろう。)

このように *TWNT* は (11) の πηγή を、血が湧き出る体の部位ではなく、湧き出る血を指すと捉えている。<sup>22)</sup> (11) に見られる「血の泉」という表現は LXX ではレビ記12:7 (すなわち (18)) においてのみ現れる<sup>23)</sup> ため、(11) の問題の表現は (18) のそれに由来すると考えられる。<sup>24)</sup> (18) の πηγή は湧き出る血を指すと見なされるため、上記の *TWNT* の解釈のごとく、(11) のそれも同じものを指す、すなわち「(血の) 湧き出し」を意味すると捉えられる。

## IV

IIIにおいて πηγή のいくつかの用法を示したが、それらに対応する用法は *fons* にも見られる。以下の (19)~(24) に *fons* のそれらの用法を示す例を挙げる。(19)~(21)において *fons* は、それぞれ地面から水が湧き出る場所、川の水が湧き出る場所、そして水以外の液体が湧き出る場所を指す。

(19) *Fons unde funditur e terra aqua viva, ut fistula a qua fusus aquae.* (VARRO ling. 5, 123)<sup>25)</sup>

(泉は、導管がそこから水が流れ出るものであるように、活水が地中から流れ出るところである。)

(20) *Antenor potuit, ... et fontem superare Timavi, unde per ora novem vasto cum murmure montis it mare proruptum et pelago premit arva sonanti.* (VERG. Aen. 1, 244)<sup>26)</sup>

(アンテーノルは……ティマーウスの水源を越すことができたが、そ

ここからは9つの口を通り、山の大きな轟きと共に、海が突然現れ出て、響きを立てる海水で陸地を覆う。）

- (21) *ex hoc fonte duae grandes venae in priora et terga discurrunt, sparsaque ramorum serie per alias minores omnibus membris vitalem sanguinem rigant.* (PLIN. nat. 11, 182)<sup>27)</sup>

(この源 [心臓] から2本の太い血管が全部と後部へ走り、枝状の組織が広がる他のより細い血管を通じて四肢すべてに生命の血液を供給する。)

- (22) においては、地中から湧き出る水を、(23)(24)においては、湧き出る水以外の液体を、それぞれ *fons* は指す。(ちなみに(23)の「血」は実は葡萄酒であると判明する。)

- (22) *Fons oritur in monte, per saxa decurrit, excipitur cenatiuncula manu facta; ibi paulum retentus in Larium lacum decedit.* (PLIN. epist. 4, 30, 2)<sup>28)</sup>

(山の中で泉が生じ、岩を通して走り、人口の小食堂で留められる。そこでしばらく保たれラーリウス湖へと落ちる。)

- (23) *Sub ipsa enim mensa quae reliquias prandii gerebat terra dehiscens imitus largissimum emicuit sanguinis fontem.* (APVL. met. 9, 34)<sup>29)</sup>

(昼食の残りが置かれていたテーブルの下で、地面が割れ、底から極めて多量の血の泉を吹き出した。)

- (24) *et offeret ante Dominum, et propitiabit pro eo sacerdos: emundabit eam a fonte sanguinis sui. . . .* (VET. LAT. lev. 12, 7 (cod. 100))<sup>30)</sup>

([それを] 主の前に捧げ、祭司は彼について宥め、彼女を自身の血の泉から清めるであろう。……)

IIIにおいて、(11)の  $\pi\eta\gamma\eta$  は湧き出る血を指すと考えられることを示した。本節で示したように、*fons* にも湧き出る血を指すという用法があるが故に、問題の(9)の *fons* は(11)の  $\pi\eta\gamma\eta$  の表す「(血の) 湧き出し」の意味を反映し得ると考えられる。

実際、以下に示した *Beda Venerabilis* (735没) によるマルコ5:27-29の解釈において、(9)の「血の泉」は、2度比喩的に捉えられた後、最後に、場所を表す *obscenum* (陰部) の属格により限定された——すなわち「湧き出し」の意味の——*fons* により言い換えられている。

... *Fons quippe sanguinis est origo peccati cuiusque fons sanguinis est immundae primordium cogitationis ex quo peccatum omne nascitur. Sed*

dominus cum uerbis euangelicis non solum opera et uerba mala compescere sed et cogitationum nequam radicem extirpare curauit cum haec utraque sacramentis euangelicis emundari donauit quasi uirtutem exsiccandi fontis obsceni suis uestimentis indidit.<sup>31)</sup>

(……なぜなら血の泉とは罪の源であり、各々の血の泉は、そこからすべての罪が生まれる汚れた思惟の始まりであるからである。だが主は、彼の福音の言葉でもって、悪しき行いと言葉を抑制するのみならず、無価値な思惟の根を引き抜くように配慮した。その時 [主は] これらの両方が福音の秘蹟により清められるのを許したのである。彼の衣服により陰部の泉を乾かす力を引き起こしたごとく。)

## V

Ⅲにおいて πηγή は地中から湧き出る水を指し得ることを示したが、本節では、この用法で用いられた πηγή が、流れとかかわる意味を持つ語と共に用いられ得ることを、以下の (25)~(27) により示す。(25)(26) において πηγή は、それぞれ καλλιρροος (美しい流れの)、ἀέναος (常に流れる) という形容詞に修飾されている。

(25) ἐπεὶ δ' ἀνέστην καὶ χερσὶν καλλιρροού ἔψαυσα πηγῆς, σὺν θυηπόλῳ χερὶ βωμὸν προσέστην, ... (A.Pers.202)<sup>32)</sup>  
(私は起き上がり、両手で清らかな流れの泉に触れると、供物を片手に祭壇に向かった。……)

(26) ἀεναοί τε πηγαί, πρὸς ἀπόλαυσιν καὶ ὑγείαν δημιουργηθεῖσαι, δίχα ἐλλείψεως παρέχονται τοὺς πρὸς ζωῆς ἀνθρώποις μαζούς· (IClem. 20.10)<sup>33)</sup>  
(楽しみと健康のために造られた、常に流れる泉は、絶え間なく人間たちに生命のための乳房を与える。)

(27) では πηγή は ρέειν (流れる) の主語となっている。

(27) τὰς ὧν δὴ πηγάς τοῦ Νείλου εὐούσας ἀβύσσους ἐκ τοῦ μέσου τῶν ὄρεων τούτων ρέειν, καὶ τὸ μὲν ἡμῖσι τοῦ ὕδατος ἐπ' Αἰγύπτου ρέειν καὶ πρὸς βορρῆν ἀνεμον, τὸ δ' ἕτερον ἡμῖσι ἐπ' Αἰθιοπίης τε καὶ νότου. (Hdt.2.28)<sup>34)</sup>

(さてナイル川の水源は底知れぬものだが、それらの山の間から流れ、

水の半分はエジプトと北方へ、他の半分はエチオピアと南へ流れると  
のことである。)

ここで重要なのは、 $\pi\eta\eta\gamma\acute{\iota}$  に認められた上記の用法が、*fons* にも認められることである。すなわち、IVで示した通り *fons* は地中から湧き出る水を指し得るが、この用法で用いられた *fons* は、 $\pi\eta\eta\gamma\acute{\iota}$  と同様、流れと関係する意味の語と共に用いられることがある。以下の (28)~(32) はそれを示す用例である。(28)(29)において *fons* は、それぞれ *fluere* (流れる)、*profluere* (流れ出る) の主語となっている。

- (28) *et in vico Insteio fontem sub terra tanta vi aquarum fluxisse ut serias doliaque quae in eo loco erant provoluta velut impetus torrentis tulerit; (LIV. 24, 10, 8)<sup>35)</sup>*

(インステュス街では、泉が地下において非常な水の勢いで流れたため、例えばそこにあった大小の土製の器が転がり、激流に運ばれたほどであった。)

- (29) *in Cantabria fontes Tamarici in auguriis habentur. . . . singuli siccantur duodenis diebus, aliquando vicenis, citra suspicionem ullam aquae, cum sit vicinus illis fons sine intermissione largus. dirum est non profluere eos aspicere volentibus, . . . (PLIN. nat. 31, 24)<sup>36)</sup>*

(カンタブリアではタマリスの泉は予言をすると考えられている。……それらの近くには絶えることのない豊かな泉があるのに、それぞれ12日間、時に20日間、全く水の気配もなく涸れる。それらが流れ出していないのを目にすることは、[それらを見たいと] 望む者たちにとって不吉なことである。……)

- (30)(31)において *fons* は、それぞれ *flumen* (流れ) と並んで主語として、*rivus* (川) と並んで目的語として現れている。

- (30) *. . . si perpetuae sunt causae quibus flumina oriuntur ac fontes, quare aliquando siccantur, aliquando quibus non fuerunt locis exeunt? (SEN. nat. 3, 11, 1)<sup>37)</sup>*

(……もし川や泉が生じる原因が永続的ならば、なぜそれらには涸れる時もあれば、なかった場所から出て来る時もあるのか。)

- (31) *fas pervicacis est mihi Thyiadas vini que fontem lactis et uberes cantare rivos atque truncis lapsa cavis iterare mella: (HOR. carm. 2, 19, 10)<sup>38)</sup>*

(私が、バッコスの強情な女たちや葡萄酒の泉や乳の豊かな川を歌い、

うつろな木の幹から滑り出る蜂蜜を繰り返して語るのは当然だ。)

(32) においては、*fons* は *flumen* の属格形を伴っている。

(32) *nam pro fonte quidem sempiterni fluminis humanum sanguinem dedisti iniustus* (Sap 11:7)

(まことに、永遠に流れる泉の代わりに、あなたは人間の血を不義の者たちに与えた。)

以上のごとく、地中から湧き出る水を指す *fons* は、流れと関係する意味の語と共に用いられることがあるため、*OLD* が *fons* の最初の語義に「地面から出る水の流れ、泉」(‘A flow of water issuing from the ground, spring’) を挙げるように、*fons* は「流れ」に近い意味で用いられ得ることが分かる。

## VI

(9) において *fons* は *sanguis* (血) の属格形 ‘*sanguinis*’ (血の) を伴っている。ウルガータにおいて ‘*sanguinis*’ が女性について用いられた例としては、(9) を除けば、II に挙げた (10) と以下の (33)~(39) がある。(10) と (33)~(35) は、いずれも (9) と同じく、福音書において長血の女性が癒される記事の一節、(36)~(39) はいずれもレビ記の一節である。これら 8 箇所を見ると、注目すべきことに、‘*sanguinis*’ は 7 回「流れ」の意味を表す名詞——*fluxus* (流れ) または *profluvium* (流出) ——にかかると対し、唯一 (39) において *fons* にかかることが分かる。

(33) *et ecce mulier quae sanguinis fluxum patiebatur duodecim annis accessit retro et tetigit fimbriam vestimenti eius* (Mt 9:20)

(見よ、12年間血の流出に苦しんでいた女が、後ろから近づき、彼の衣服の縁に触れた。)

(34) *et mulier quae erat in profluvio sanguinis annis duodecim* (Mc 5:25)

(12年間血が流出していた女がいた。)

(35) *et mulier quaedam erat in fluxu sanguinis ab annis duodecim quae in medicos erogaverat omnem substantiam suam nec ab ullo potuit curari* (Lc 8:43)

(12年来血が流出していたある女がいた。彼女は医者たちに自分の全財産を費やしたが、誰からも癒してもらうことができなかった。)

(36) *qui offeret illa coram Domino et rogabit pro ea et sic mundabitur a profluvio sanguinis . . .* (Lv 12:7)

(彼 [祭司] はそれらを主の前に捧げ、彼女のために祈り、こうして彼女は自身の血の流出から清められるであろう。……)

- (37) *mulier quae redeunte mense patitur fluxum sanguinis septem diebus separabitur* (Lv 15:19)

(月が改まると血の流出に苦しむ女は、7日間遠ざけられるであろう。)

- (38) *mulier quae patitur multis diebus fluxum sanguinis non in tempore menstruali vel quae post menstruum sanguinem fluere non cessat quamdiu huic subiacet passioni imunda erit quasi sit in tempore menstruo* (Lv 15:25)

(月経の期間にないのに多くの日数血の流出に苦しむか、月の血の後で流出が止まらない女は、この病に罹っている間は月の期間にあるごとく汚れているであろう。)

- (39) *qui coierit cum muliere in fluxu menstruo et revelaverit turpitudinem eius ipsaque aperuerit fontem sanguinis sui interficientur ambo de medio populi sui* (Lv 20:18)

(ある男が月の流出にある女と交わり、その恥部を露わにし、また彼女が自らの血の源を開けば、共に自らの民の中から絶たれるであろう。)

ここで注意すべきは、これら 8 箇所における唯一の例外である (39) の *fons* が、血の湧き出しではなく、血が湧き出す場所（陰部）を指す——他の 7 箇所におけるごとく女性の出血を指すのではない——と考えられることである。<sup>39)</sup>

従って、ウルガータにおいて女性の出血が表現される際、*fons* よりむしろ「流れ」を意味する名詞が用いられることが分かる。なお、*fons* が「流れ」に近い意味を表し得ることは V で示した通りである。故に、問題の (9) *fons* を「流れ」に近い意味で捉えることは可能であると言える。

## VII

最後に、(9)に見られる *fons* の訳語となった *ryne* の用法について考察する。(9)におけるように女性の出血について用いられた ‘*blodes ryne*’（血の流出）という表現は、WSCp からの引用である (10)においても ‘*fluxus sanguinis*’（血の流出）に対応して現れるが、ここで重要なのは、同じ古英語表現が WSCp 以外のテキストからの引用である次の (40)(41)にも見ら

れるという事実である。

- (40) Deorwurðe wæron ða fnædu. þe swa eaðelice þa untrumnyssa aflygdon; Swa swa we rædað be sumon wife. þe wæs twelf gear geuntrumod ðurh *blodes ryne*. (ÆCHom II, 28 228.231)<sup>40)</sup>

(病をかくも容易に追い出した [衣服の] 縁は貴いものであった——12年間血の流出により衰弱していたある女について我々が読むように。)

- (41) Hit gelamp ða æt þære mæssan. þæt man rædde þæt godspell. hu þæt wif wearð gehæled. þe wæs on *blodes ryne*. þaða heo hrepode þæs hælendes reaf. (ÆLS (Lucy) 11)<sup>41)</sup>

(血が流出していた女が主の衣服に触れたらいかに癒されたか、ミサで福音書が読まれたことがあった。)

このことから (9) におけるごとく *ryne* が女性の出血を指すのに用いられるのは例外的な用法ではないと認められる。

なお、以下の (42)~(49) に示すように、*blod* と *ryne* の 2 語からなる *blodryne* (出血) という複合語がある。

(42)(43) においてこの語は、それぞれ「血の流出」を意味する表現 ‘*effusio sanguinis*’, ‘*profluvium sanguinis*’ の訳語として、女性に限らない出血を指すのに用いられている。

- (42) On þæm enleftan gearre his rices Sermende hergedon on Pannoniam; þa he þiderweard wæs mid fierde, þa gefor he on *blodryne*. (Or 6 33.152.5)<sup>42)</sup>

(彼 [ウァレンティニアヌス] の統治の12年目、サルマチア人がパンノニアを襲撃した。彼は、軍と共にそこへ向かっているとき、出血により死んだ。)

... *subita effusione sanguinis*, quod Graece apoplexis uocatur, suffocatus et mortuus est. (OROS. Hist.adv.pag. 7.32.14)<sup>43)</sup>

(……ギリシャ語で卒中と呼ばれる突然の血の流出により窒息して死んだ。)

- (43) heo þæt sar genimð & heo ða wunda geðeodeþ & þone *blodryne* gewrið. (Lch I (Herb) 175.1)<sup>44)</sup>

(それ [ノコギリソウ] は痛みを取り、またそれは傷を塞ぎ、出血を止める。)

et dolorem tollit et eadem glutinat et *profluvium sanguinis* stringit. (A)

(痛みを取り、それ [傷] を塞ぎ、血の流出を止める。)

WSCp からの引用である (44)~(46) においては、*blodryne* はそれぞれ (33)~(35) の「血の流出」を意味する表現 ‘*sanguinis fluxus*’, ‘*fluxus sanguinis*’, ‘*profluvium sanguinis*’ の訳語として、女性の出血について用いられている。

(44) & þa an wif þe þolode *blodryne* twelf gear genealæhte wiðæftan. . . . (Mt (WSCp) 9.20)<sup>45)</sup>

(12年間出血に苦しんでいた女が、後ろから近づき、……)

(45) & þa þæt wif ðe on *blodryne* twelf winter wæs. (Mk (WSCp) 5.25)

(12年間出血していた女がいた。)

(46) Ða wæs sum wif on *blodryne* twelf ger; . . . (Lk (WSCp) 8.43)<sup>46)</sup>

(12年間出血していたある女がいた。……)

さらに、WSCp 以外のテキストからの引用である (47)~(49) においても *blodryne* は女性の出血を指すのに用いられている。また、(47) のラテン語原文において「血の流出」(‘*profluvium sanguinis*’) という表現が見出されるが、(48)(49) のラテン語原文においては血への言及は見出されても、「流れ」を意味する名詞は見出されない。

(47) Sum wif wæs on *blodryne* þearle geswenct. þa hreþode heo his reaf swa man ræt on þam godspelle be sumum oþrum wife. and heo wearð sona hal. (ÆLS (Martin) 1256)<sup>47)</sup>

(ある女が出血にひどく苦しんでいた。そこで彼女が、福音書で別の女について読まれるように、彼の衣服に触れると、彼女は直ちに直った。)

mulierem *profluuiio sanguinis* laborantem, cum Martini uestem . . . contigisset, sub momento temporis fuisse sanatam. (SULP.SEV. Dial. III.9.3)<sup>48)</sup>

(血の流出に苦しむ女が、……マルティヌスの衣服に触れると直ちに癒されたこと。)

(48) Ono nu þæt wiif in bloddes flownesse geseted hergendlice meachte Drihtnes hrægle gehrinan, forhwon þonne, se þe *blodryne* þrowað monaðaðle, ne afeað hire in Drihtnes cirican gongan? (Bede 1 16.78.14)

(さてもし血の流出の状態に置かれた女が見事に主の着物に触れることができたなら、なぜ月の病としての出血に苦しむ女が主の教会に行くことが許されないのか。)

... cur quae menstruam *sanguinis* patitur, ei non liceat Domini ecclesiam intrare? (BEDA. Hist.eccl. 1.27, 92)

(……なぜ血の月の〔習慣〕に苦しむ女が主の教会に入ることが許されないのか。)

- (49) Eft gif heo wylle þæt ðæt hyre *blodryne* cyme to, cembe eft hyre heafod under morbeame, ... (Med 1.1 2.3)<sup>49)</sup>

(反対に出血が戻ることを彼女が望むなら、再び彼女の頭を桑の木の  
下で梳り、……)

Rursum si voluerit ut eidem veniat *sanguis*, similiter sub arbore mori pectinet capillos ... (L)

(反対に血が戻ることを望むなら、同様に桑の木の下で頭髪を梳り、  
……)

よって、女性の出血について用いられた *blodryne* については以下の2点  
が指摘できる。

1. WSCp にのみ見られる特殊な表現ではない。
2. ラテン語原文にかかわらず用いられ得る。

*blodryne* についてのこれら2点もまた、(9)におけるように *ryne* が女性の  
出血について用いられるのは例外的な用法ではないことを、間接的には  
あれ示している。

結論として、Mk (WSCp) 5.29の *ryne* は、ラテン語原文の *fons* が「流れ」  
に近い意味で捉えられ得るが故に、また *ryne* が女性の出血について用い  
られるのは例外的な用法ではないが故に、*fons* を訳すのに用いられたと考  
えられる。

## 注

- 1) Cicero: *The Verrine Orations*, vol. 2, with an English trans. by L. H. G. Greenwood, rev., LCL (Loeb Classical Library) 293 (1953), p. 426. (1) は *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed., 2 vols. (Oxford, 2012)), s.v. *fons* 1の「地面から出る水の流れ、泉」(‘A flow of water issuing from the ground, spring’) に挙げられている例である。古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、*DOE* (*The Dictionary of Old English: A-H on CD-ROM* (Toronto, 2017)) に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または *TLL* (*Thesaurus Linguae Latinae* (Leipzig, 1900-)) に従う。なお、古英語および

ラテン語の引用文中のイタリック体、ギリシャ語の引用文中の下線は、すべて筆者によるものである。

- 2) O. Cockayne, *Leechdoms, Wortcunning, and Starcraft of Early England*, vol. 2 (London, 1865), p. 32. (2) は BT (J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898)), s.v. *will* の「泉 (文字通りの、また比喩的な)」(‘*A well, spring, fountain* (lit. and fig.)’) の語義の下に挙げられている例である。
- 3) *Pliny: Natural History, Books 8–11*, with an English trans. by H. Rackham, 2nd ed., LCL 353 (1983), p. 214. (3) は *OLD*, s.v. *fluxus*<sup>2</sup> の「流れ、流出; (特に医学的) 流出」(‘*A flow, discharge; (esp., med.) a flux*’) の語義の下に挙げられている例である。
- 4) G. P. Krapp, *The Junius Manuscript*, ASPR 1 (New York, 1931), p. 7. (4) は BT, s.v. *ryne* III の「(流体について) 進路、水路、流れ、(血の) 流出」(‘*of fluids, a course, water-course, a flow, flux of blood*’) に挙げられている例である。
- 5) W. W. Skeat, *The Gospel according to Saint Matthew and according to Saint Mark* (Cambridge, 1887, 1871; Nachdr. Darmstadt, 1970); *The Gospel according to Saint Luke and according to Saint John* (Cambridge, 1874, 1878; Nachdr. Darmstadt, 1970).
- 6) R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, ed. quinta (Stuttgart, 2007).
- 7) ウルガータの語句の検索には *Novae Concordantiae Bibliorum Sacrorum iuxta Vulgatam Versionem Critice Editam*, quas digessit B. Fischer, 5 tom. (Stuttgart-Bad Cannstatt, 1977) を使用した。
- 8) T. Miller, *The Old English Version of Bede’s Ecclesiastical History of the English People*, pt. 1, EETS 95, 96 (London, 1890–91).
- 9) B. Colgrave and R. A. B. Mynors, *Bede’s Ecclesiastical History of the English People* (Oxford, 1969).
- 10) S. J. Crawford, *The Old English Version of the Heptateuch*, EETS 160 (1922; repr. London, 1969). (8) は BT, s.v. *will* にラテン語と共に挙げられている例である。
- 11) R. M. Liuzza, *The Old English Version of the Gospels*, vol. 2, Notes and Glossary, EETS 314 (Oxford, 2000) は Latin-Old English Wordlist において、*ryne* を *wyl* と並べて *fons* の訳語として挙げている。
- 12) Liuzza, Glossary, s.v. *ryne* 参照。
- 13) Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 28. revidierte Aufl. (Stuttgart, 2015). ギリシャ語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、LSJ (H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996)) および G. W. H. Lampe, *A Patristic Greek Lexicon* (Oxford, 1961) による。

- 14) *Herodotus: Books III–IV*, with an English trans. by A. D. Godley, rev., LCL 118 (1938), p. 76.
- 15) *Herodotus: Books I–II*, with an English trans. by A. D. Godley, rev., LCL 117 (1926), p. 304. Hdt.2.28はLSJ, s.v. πηγῆ IIの「源」(‘fount, source’)に挙げられている。
- 16) I. Bruns, *Alexandri Aphrodisiensis Praeter Commentaria Scripta Minora: De Anima Liber cum Mantissa* (Berolini, 1887). W. Bauer, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, 6. Aufl. hrsg. v. K. Aland u. B. Aland (Berlin, 1988), s.v. πηγῆには「泉」(‘d. Quelle’)の意味が示され、(15)はその下の1の「本来的」(‘eigtl.’)にマルコ5:29に関連して挙げられている。
- 17) A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006). (16)はT. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint* (Louvain, 2009), s.v. πηγῆ 2の「液体の流れ」(‘stream of liquid’)において、「流水について」(‘of running water’)用いられた例として挙げられている。
- 18) *Sophocles: Antigone*, . . . ed. and trans. H. Lloyd-Jones, LCL 21 (1998), p. 78. (17)はLSJ, s.v. πηγῆ I.2において、「比喩的に、涙について」(‘metaph., of tears’)用いられた例として挙げられている。
- 19) (18)はMuraoka, s.v. πηγῆ 2において、「月経中の女について」(‘of menstruating woman’)用いられた例として挙げられている。(18)のπηγῆはヘブライ語原文のמקור (泉)に対応するが、F. Brown, S. R. Driver, and C. A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford), s.v. מקור 4の「=(出産後の血の)流出」(‘=flow of blood after child-birth’)にレビ記12:7的דימת [彼女の血の泉]が挙げられている。
- 20) *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, begr. v. G. Kittel, hrsg. v. G. Friedrich, 11 Bde. (1933–79; Nachdr. Stuttgart, 1990), Bd. 6, s.v. πηγῆ, S. 116, 8–13.
- 21) *TWNT*, s.v. πηγῆ, S. 116, Anm. 18.
- 22) なお(11)は、C. G. Bretschneider, *Lexicon Manuale Graeco-Latinum in Libros Novi Testamenti*, ed. tertia (Lipsiae, 1840), s.v. πηγῆ 3では「流出、ή ῥύσις [流出]と同じ」(‘profluvies, i. q. ή ῥύσις’)の語義の下に挙げられ、また*The Revised English Bible with the Apocrypha* (1989)でも「すると立ちどころに血の流れが乾き、……」(‘And there and then the flow of blood dried up . . .’)と訳されており、こられにおいてもTWNTにおけると同様、(11)のπηγῆは湧き出す血を指すと捉えられている。
- 23) LXXの語句の検索にはE. Hatch and H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint*, 2nd ed. (Grand Rapids, 1998)を使用した。

- 24) R. T. France, *The Gospel of Mark: A Commentary on the Greek Text* (Grand Rapids, MI, 2002), p. 237n では「ἡ πηγὴ τοῦ αἵματος [血の泉] という生き生きとした句は LXX のレビ記 12:7 に由来する」(‘The vivid phrase ἡ πηγὴ τοῦ αἵματος derives from LXX Lv. 12:7’) と記され、また Bauer, s.v. πηγὴ 1 でも LXX のレビ記 12:7 がマルコ 5:29 との関連で挙げられている。
- 25) *Varro: On the Latin Language, Books V–VII*, with an English trans. by R. G. Kent, rev., LCL 333 (1951), p. 118. (19) は *OLD*, s.v. *fons* 1 に挙げられている例である。
- 26) *Virgil: . . . Aeneid I–VI*, with an English trans. by H. R. Fairclough, rev. by G. P. Goold, LCL 63 (1999), p. 278. (20) は *OLD*, s.v. *fons* 3 の「川の水源または源流」(‘The source or headwaters of a river’) に挙げられている例である。
- 27) *Pliny: Natural History, Books 8–11*, LCL 353, p. 546. (21) は *OLD*, s.v. *fons* 3b の「(様々な液体や他の放射物の源に用いられて)」(‘(applied to the source of various liquid and other emanations)’) に挙げられている例である。
- 28) *Pliny: Letters, Books I–VII*, with an English trans. by B. Radice, LCL 55 (1969), p. 316. (22) は *OLD*, s.v. *fons* 1 に挙げられている例である。
- 29) *Apuleius: Metamorphoses, Books VII–XI*, ed. and trans. J. A. Hanson, LCL 453 (1989), pp. 188–90. (23) は *OLD*, s.v. *fons* 1f の「(何か他の液体の泉または流れについて)」(‘(of a spring or flow of some other liquid)’) に挙げられている例である。
- 30) U. Robert, *Pentateuchi Versio Latina Antiquissima e Codice Lugdunensi* (Paris, 1881), p. 220.
- 31) D. Hurst, ‘In Marci Evangelium Expositio’, *Bedae Venerabilis Opera*, pars 2, 3, CCSL 120 (Turnholti, 1960), p. 497.
- 32) *Aeschylus: Persians, . . .* ed. and trans. A. H. Sommerstein, LCL 145 (2008), pp. 34–36. (25) は LSJ, s.v. πηγὴ I.1 の「流水」(‘running water’) に挙げられている例である。
- 33) K. Bihlmeyer, *Die Apostolischen Väter*, 1. Teil, 3. Aufl. (Tübingen, 1970), S. 47. (26) は Bauer, s.v. πηγὴ 1 に挙げられている例である。
- 34) *Herodotus: Books I–II*, LCL 117, p. 304.
- 35) *Livy: History of Rome, Books XXIII–XXV*, with an English trans. by F. G. Moore, LCL 355 (1940), p. 206. (28) は *TLL*, s.v. *fons* において fluit (流れる) の主語として用いられた例に挙げられている (vol. 6, pt. 1, p. 1027, 3)。
- 36) *Pliny: Natural History, Books 28–32*, with an English trans. by W. H. S. Jones, LCL 418 (1963), pp. 390–92. (29) は *TLL*, s.v. *fons* において siccatur (涸れる) の主語として用いられた例に挙げられている (p. 1027, 15)。
- 37) *Seneca: Naturales Quaestiones, Books I–III*, with an English trans. by T. H.

- Corcoran, LCL 450 (1971), p. 224. (30)は *TLL*, s.v. *fons* において *oritur* (生じる) の主語として用いられた例に挙げられている (p. 1026, 85)。
- 38) *Horace: Odes and Epodes*, ed. and trans. N. Rudd, LCL 33 (2012), p. 136. (31)は *TLL*, s.v. *fons* IIA の「活水に例えられた物質について」(‘*de materiis cum aqua viva comparatis*’) 用いられた例として挙げられている (p. 1024, 72-73)。
- 39) (39) の *fons* はヘブライ語原文の מקור (泉) に対応するが、BDB, s.v. מקור 3 の「(月経血の) 源」(‘*source of menstuous blood*’) にレビ記20:18の מַדְמֵי מַ [彼女の血の泉]が挙げられている。またIIIで引用した *TWNT* の注の記述も参照。
- 40) M. Godden, *Aelfric’s Catholic Homilies: The Second Series, Text*, EETS s.s. 5 (London, 1979). なお Godden (*Aelfric’s Catholic Homilies: Introduction, Commentary and Glossary*, EETS s.s. 18 (Oxford, 2000), p. 564) は、(40) においてマルコ 5:25 (すなわち (34)) が訳されているとするが、*geuntrumod* (衰弱した) — *patior* (苦しむ) に由来すると見られる—の使用および(衣服の)縁への言及—マルコにはない—から、マタイ 9:20 (すなわち (33)) の前半が訳されていると考えるべきである。
- 41) W. W. Skeat, *Aelfric’s Lives of Saints*, vol. 1, EETS 76, 82 (London, 1881-85), p. 210. (41)は *DOE*, s.v. *blod* A.2.a.ii の「*blodes . . . ryne* 『(月経の) 血の(異常な) 流出』」(‘*blodes . . . ryne* “(abnormal) flow of (menstrual) blood”’) に挙げられている例である。
- 42) J. Bately, *The Old English Orosius*, EETS s.s. 6 (London, 1980). (42)は *DOE*, s.v. *blodryne* c の「明らかに脳への血の強い流れという考えに基づいた、卒中」(‘*apoplexy, apparently based on the notion of the rush of blood to the brain*’) にラテン語と共に挙げられている例である。
- 43) C. Zangemeister, *Pauli Orosii Historiarum adversum Paganos Libri VII*, CSEL 5 (Vindobonae, 1882), p. 515.
- 44) H. J. de Vriend, *The Old English Herbarium and Medicina de Quadrupedibus*, EETS 286 (London, 1984), p. 220. 並べて引用したラテン語原文は同書の向かいの頁による。(以下同書からの引用の際は同じ。)(43)は *DOE*, s.v. *blodryne* の「血の流出、出血」(‘*flow of blood, bleeding, hemorrhage*’) の語義の下にラテン語と共に挙げられている例である。
- 45) (44) および以下の(48)(49)は *DOE*, s.v. *blodryne* b の「月経の血の(異常な) 流出」(‘(abnormal) flow of menstrual blood’) にラテン語と共に挙げられている例である。
- 46) (46)は BT, s.v. *blodryne* の「血の流出、出血」(‘*A running of blood, an issue*’) の語義の下にラテン語と共に挙げられている例である。
- 47) W. W. Skeat, *Aelfric’s Lives of Saints*, vol. 2, EETS 94, 114 (London, 1890-1900), p. 296. (47)は T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement* (Oxford,

ラテン語 *fons* の訳語としての古英語 *ryne* について

- 1921), s.v. *blodryne* に挙げられている例である。
- 48) C. Halm, *Sulpicii Severi Libri Qui Supersunt*, CSEL 1 (Vindobonae, 1866), p. 207.
- 49) De Vriend, p. 240.

## On Old English *ryne* as the Equivalent of Latin *fons*

Satoru ISHIHARA

Old English *ryne* ‘flow’ is used to translate Latin *fons* ‘fountain’ in *And þa sona wearð hyre blodes ryne [=fons] adruwod. & heo on hire gefredde þæt heo of þam wite gehæled wæs* (Mk (WSCp) 5.29) ‘And then soon the flow of her blood was dried up, and she felt in herself that she was healed of the torment’. Why is the *fons* in Mc 5:29 translated not by *will* ‘fountain’ but by *ryne*?

We find *fons* referring to water issuing from the ground, e.g. *Fons oritur in monte, per saxa decurrit, excipitur cenatiuncula manu facta* (PLIN. epist. 4, 30, 2) ‘A fountain rises in a mountain, runs down through rocks, is caught in a small artificial dining-room’, and also used of flow, e.g. *et in vico Insteio fontem sub terra tanta vi aquarum fluxisse . . .* (LIV. 24, 10, 8) ‘and in the Vicus Inteus an underground spring flowed with such strength of waters that . . .’, which shows that *fons* can have a meaning similar to ‘flow’.

And in the Vulgate the genitive *sanguinis* ‘of blood’ used of a female occurs 7 times with nouns meaning ‘flow’, e.g. *et ecce mulier quae sanguinis fluxum patiebatur duodecim annis . . .* (Mt 9:20) ‘and behold a woman who was afflicted with a flow of blood twelve years . . .’, but does only once with *fons* except in Mc 5:29, i.e., in Lev. 20:18, where the *fons* can refer to the private parts of a menstruating woman, not to an issue of blood. Thus we can say that in the Vulgate nouns meaning ‘flow’, rather than *fons*, are used of female hemorrhage, and therefore that the *fons* in Mc 5:29 can be grasped in a sense similar to ‘flow’.

Moreover, *ryne* used of female hemorrhage is found outside WSCp as well, e.g. . . . *Swa swa we rædað be sumon wife. þe wæs twelf gear geuntrumod ðurh blodes ryne* (ÆCHom II, 28 228.231) ‘. . . As we read about some woman who was twelve years weakened through a flow of blood’, which clarifies that it is not an exceptional use of *ryne*.

All the above facts enable us to conclude that in Mk (WSCp) 5.29 the *fons* is translated by *ryne* because the *fons* can be taken in a sense similar to ‘flow’ and also because *ryne* is used unexceptionally of female hemorrhage.